



Wa-style Relics in Korea: Wa-style Relics Excavated in the Gaya Region

高久健二

はじめに

①研究史

②3世紀後半～5世紀前葉の倭系遺物

③5世紀中葉～6世紀前半の倭系遺物

おわりに



本稿は加耶地域出土の倭系遺物を総合的に解釈し、韓国側における対倭交渉の実態およびその変化を明らかにすることを目的とする。具体的には加耶地域出土の倭系遺物を3世紀後半～5世紀前葉と5世紀中葉～6世紀前半の二時期に分けて、その出土様相、分布、時期などについて検討した。

その結果、まず3世紀後半～4世紀については、大成洞古墳群の倭系遺物が注目され、とくに大型木槧墓である大成洞13号墳に複数の倭系遺物が副葬されている点から、倭との交渉を主導していたのは金海の上位階層であり、これらを通じて倭系遺物がセットでもたらされたものと推定した。また、南部地域出土の土師器および土師器系土器は、その様相からみて、3世紀後葉～5世紀前葉に倭から渡來した人々が在地の集団とともに一定期間生活していたことを示すものであるが、倭人集団が数世代にわたって長期定住した可能性は低いと考えられる。したがって、その目的は政治的な移住などではなく、南部地域の鉄入手するための比較的短期間の断続的な渡来ではなかったと推定される。また、倭系遺物の分布が南部海岸地域に集中しており、内陸部ではほとんど出土していないことからみて、当時の対倭交渉の窓口が南部地域に限定されていたものと推定した。

5世紀中葉～6世紀前半になると、内陸地域でも倭系遺物が出土するようになり、前時期に比べて分布域が拡大する。とくに、大伽耶の中心地である高靈地域では、池山洞古墳群などで倭系遺物が比較的多く出土している。しかし、倭系遺物の分布の拡大が、そのまま倭人の行動範囲の拡大を意味するものではなく、5世紀後半以後も倭が加耶と直接交渉する地域は、南部海岸地域に集中していた可能性を指摘した。5世紀後半になると内陸の大伽耶地域と、固城などの南部海岸地域とのネットワークが確立し、これに起因して倭系遺物の分布が内陸地域に拡大したものと考えられる。つまり、倭系遺物の拡大はこのようなネットワークを背景にして南部海岸地域から内陸部へ再分配された結果であり、加耶における倭人の活動範囲はかなり限定されていたのではないかと推定した。